

平成 29 年度 研究成果報告書

Research Achievement Report FY2017

講座名・職名 Course Title・Job Title	アジア I 講座・准教授
氏名 Name	小西 敏夫
専門分野 Academic Field	朝鮮語学

主たる研究テーマ Principal Research Subject	<p>積譜詳細、月印千江之曲及びその原典における言語表現の違いについて</p> <p>1449年に刊行された『月印積譜』の第14には、『法華経』の「化城喩品」が朝鮮語に訳されている。全訳ではなく、部分的に省略されているところがある。『法華経』は、初期大乘仏教経典『サッドルマ・ブンダリーカ・スートラ』が漢訳されたものである。1463年に刊行された『法華経諺解』においても、それが朝鮮語に翻訳されており、「化城喩品」は、『法華経諺解』の巻3に収録されている。</p> <p>今年度は、『法華経』の「化城喩品」の言葉が、『月印積譜』第14と『法華経諺解』巻3において、どのような朝鮮語に翻訳されているかに注目した。文字に関して言えば、『法華経諺解』の方が『月印積譜』よりも14年後に刊行されており、『月印積譜』において使用されていた「唇軽音 p」の文字が『法華経諺解』の方では使用されなくなっている。語彙に関しては、『法華経諺解』巻3の方では、原文である『法華経』の漢字語がそのまま使われているのに対し、『月印積譜』第14の方では、それを固有の朝鮮語に訳しているものが多かった。たとえば、『法華経』や『法華経諺解』巻3の方では、「名」、「十」、「心」、「中間」などのように漢字語であらわれているものが、『月印積譜』第14の方では、「なまえ」、「とお」、「こころ」、「あいだ」などのように固有の朝鮮語であらわれているのである。また、『法華経』や『法華経諺解』巻3の方で「諸」という漢字の接頭辞であらわれているものが、『月印積譜』第14の方では、複数をあらわす固有朝鮮語の接尾辞であらわれていたりする。たとえば、『法華経』や『法華経諺解』巻3の方では、「諸比丘」、「諸梵衆」などのように漢字語であらわれているものが、『月印積譜』第14の方では、「比丘たち」、「梵衆たち」となっているのである。この「諸」に関しては、『法華経諺解』巻3では、「あらゆる」あるいは「さまさまの」という固有の朝鮮語であらわれている場合もある。たとえば、『法華経』の「諸国土」、「諸天華」が、『法華経諺解』巻3では「あらゆる国土」、「さまさまのてんのはな」、『月印積譜』第14の方では、「国土たち」、「てんのはなたち」となっているのである。しかし、『法華経』や『月印積譜』第14の方で漢字語であらわれているものが、『法華経諺解』巻3の方では固有の朝鮮語であらわれる場合もある。『法華経』や『月印積譜』第14の方で「微塵」、「下」、「深」などのように漢字語であらわれているものが、『法華経諺解』巻3の方では、「ちいさいちり」、「した」、「ふかく」などのように固有の朝鮮語であらわれているのである。その他、『月印積譜』第14と『法華経諺解』巻3でどちらも固有の朝鮮語に訳されていても、異なる語に訳されている場合もある。たとえば、『月印積譜』第14であらわれている固有語が、『法華経諺解』巻3ではその縮約形であらわれている場合などである。また、朝鮮語の否定表現には短い形と長い形があるが、『月印積譜』第14では短い形であらわれているものが、『法華経諺解』巻3では長い形であらわれる傾向があるようである。</p> <p>これからも、『月印積譜』と『法華経諺解』にあらわれる言語表現について研究を続けていく予定である。</p>
--	---